

「私の農業」

日本大学
生物資源科学部動物資源科学科 4年 本田 智花

私の将来の夢は子供を持つこと。普通の女の子なら「お嫁さんになりたい」のだろうけれど、私は「お母さんになりたい」のだ。生物は子孫を残していくものである。その中でほ乳類は子育てというものができる。だから、たぶん私が思うことは生物学的に当然のことだと思う。しかし、人にはそれ以外にいろいろな欲求がある。そして、現代の女性は子供を持つことを第一と考えていないと思う。仕事がしたい、キャリアを磨きたい、資格が取りたい、おしゃれしたい、エステに行きたい、遊びたい…子供を持ちたいという欲求はほとんどの場合後の方、もしくは持ちたくないと思える人がいるのではないだろうか。だが、私はなにより増して子供がほしい。なぜなら子育てよりも面白そうなものないだろうと思うからだ。それに子供はかわいい。私は子供を見ると笑顔にならずにはいられない。早くお母さんになってかわいい自分の我が子を精一杯抱きしめてあげたいと思うのだ。もちろん、子育ては楽しいことばかりではないことはわかっている。大変なときもあるだろうし、悩んだり、辛かったりするときもあるだろう。そして子育てには終わりが無い。そう、自分が墓に入るまで終わらない。責任というもの付きで。それでもお母さんになりたい。

話は変わるが、私の将来の夢第2位は農業をやることである。その夢を画き始めたのは大学に入ってからだ。それまで農業には全く関心がなかった。農業との出会いは大学の部活動の「牛引き」である。「牛引き」とは簡単に言えば牛を調教することで、大学にいる見本牛(主に肉用種)を周2、3回借りてブラッシングしたり、歩かせたりし、学祭で展示をするといった活動をしている。もちろん大学に入るまで牛には興味なかった。動物は好きであったが、牛など観光牧場で小さい頃触れたぐらいであった。大学に入学し、動物資源科学学術研究部という部に入った。この部は主に研究が活動内容なのだが、その中で四つのパートに別れ、どれか一つに所属できる。その中の一つに「牛引き」があるのだ。同じ牧場の動物を借りて活動するパートに「リトルファーム」というものもある。こちらは主にポニー、ロバ、ヤギを担当し、飼養管理もしている。パートを選ぶ時どちらにしようか悩んだ。せっかく動物資源科学科に入ったのだから、動物には触れたいと思っていたが、リトルか牛か…正直、リトルに心は揺れていたと思う。悩んでいる時、牛引きに見学に行った。そして、ちょうど削蹄をされている牛がいた。その時、あんなに大きい牛が振りかざされる木槌の音にいちいち怯え、涙を流していたのだ。私は「牛って泣くんだ」…と驚愕し、同時に愛らしいという感情がめばえた。その後、もちろん牛引きに入り、その時から私は牛というものが大好きになった。そして少しずつ、自分の将来にぼんやりと牧場で牛を飼っている姿がだんだんと写るようになっていったのだと思う。

大学1年生の後期の授業で、職業について調べて発表するという課題があった。私はそこで「酪農家」について発表した。その時はまだ本当にではなく、そんな選択肢もあるかな程度だったと思う。

私が本気で農業に携わりたいと思うようになったのは、大学2年の夏の北海道の別海町の牧場での実習からだと思う。2週間、その牧場でお世話になった。その牧場は集約放牧をやっていた。確かに朝は早く、仕事も辛かった。毎日同じことの繰り返し。朝5時に起き、牛を待機所に追って、乳洗って、搾乳して、哺乳して、終わるのが9時。それから朝ご飯の支度をして10時頃やっとならべて、少し休憩し作業をやり、お昼食べ、作業やり、また15時頃から搾乳を始め、終わるのが7時。ご飯食べるのが8時。お風呂入り、寝るという生活だった。けれども、楽しかった。なにより、大好きな牛といれることが幸せだった。朝焼け夕焼け、星空すばらしかった。そして、毎日同じことをやっとならべてはいるが、一日一日、違うのだ。たった2週間だったけれど、毎日違ったし、きっと夏と冬でも違うし、今年と来年でも違うのだろう。そう考えると酪農というものはなんと楽しそうな仕事だろう、そう思った。そして将来酪農を、牛飼いをやろうと決意したのだ。

酪農から農業全般をやりたいと変わったのは、牛引きの先輩にあるマンガを紹介されてからだ。それは「美味しんぼ」である。雁屋哲さんの1980年代から始まり今や100巻を超しているグルメマンガの代表作である。そこでは食の大切さについて書かれている。私はそのマンガを読み食の真実を知った。お金さえ払えばいつでも気軽に早く食べることができる現代の食の真実を。農薬、化学合成肥料まみれの野菜、ポストハーベストがかけられた輸入品、添加物まみれの食品、古き伝統の日本の技術を捨て経済効率一辺倒の加工食品、なにも考えず、早さ、安さ、見た目の良さだけを考えている消費者…挙げればきりが無い今の日本の食の問題を知ることができた。それから、生活が変わった。一人暮らしをしていて、今まで安い食品が大好きだったが、なぜ安いのか考えて買うようになった。なるべく加工されていない食品を買うようになった。それから本を読むようになった。食の本、酪農の本、そして農業の本も。今の食の現状を知ってからその食の原点である農業を自分の手で1からやりたいと思ったのだ。

私の理想の農業は日本の古き民家、家の周りには畑と田んぼ、さまざまな果実の木が植えられ、春夏秋冬様々な野菜、果実、米がなる。そして大豆からは味噌、醤油、納豆、豆腐を作り、麦からはパンやビールを作り、米からはみりんやお酢、清酒を作る。ニワトリがいて毎朝卵をいただく。時々お肉もいただく。犬も猫もいて気ままに暮らしている。そして家の裏が山でそこに牛がいる。山の草を食べ暮らし、私たちは何もしなくていい。雄も一緒に放つから恋もできる。親と子も一緒にいれる。搾乳のときだけ山を降りて、人間に牛乳というお裾分けをくれる。私たちはそれを飲んだり、ヨーグルトにしたり、バターにしたり、

チーズにしたりする。これが私の理想の農業。そう、ほとんど自給自足に近いのだ。基本私たちの為に作り、作りすぎたら、地域の人、もしくは私たちの野菜や乳や加工品がほしい人に分けたいと考えている。もちろん、自給自足で生活していけるわけない!こんなことで成り立つのはあくまで理想でしかない!という人がいるかもしれない。私もこんな考え甘いことは百も承知だ。でもこれが私の理想なのだ。どんな苦勞困難があってもいい。絶対これに近づいてやる。いや、実現させてみせる。

そしてこの都会の謙遜からかけ離れたこの地で、子供を育てたい。自給自足に子供を巻き込むなんて親のエゴだ。現金収入がないから、子供の可能性を狭めるという人がいるけれども、私はそうは思わない。都会で育ち、お金もあり、勉強ができ、いくらでも可能性のあるはずなのに可能性をつかめてさえいない子が日本に何人いるだろうか。金さえ払えば何でも買える豊かな国のはずなのに、心が豊かだはない。私はそれよりも子供時代にいっぱい自然の中で遊んでほしい。泥だらけ、傷だらけになって山や川で遊び、動植物とふれあい、勉強はそこそこでいい。知識よりも知恵を身につけてほしい。心が豊かになってほしい。そして何より食べ物を大切に、命を大切にしてほしい。食べ物はすべて命をいただいていることであって、その命は人間のために生きた命なんて1つもないのだということを学ばせたい。そのために自分が農業をやる。野菜を作り、鶏を飼い、卵を取り、屠殺もする。牛を飼い、乳をしぼる。そしてさまざまなものから様々なものへ加工していく。その一部始終を子供に見せながら子育てをしたい。だから早く子育てがしたいのだ。

今回のこのコンクールは『酪農の夢』というテーマではありますが、趣旨がずれてしまっていると思います。ですが、私の夢は酪農家ではなく、農家でもなく、百姓のお母ちゃんです。ありのままを書かせていただきました。
